

平成 30 年度 AO入試問題集 (文学部)

東北大学入試センター

公表期限：2021年3月末

※各学部試験問題の注意書きに記載されたページ数と、本問題集のページ数が異なる場合がありますが、問題の内容及び問題数は相違ありません。

平成三〇年度（二〇一八年度）

東北大学文学部 アドミSSIONズ・オフィス入学試験 期

筆 記 試 験

試験期日 平成二十九年十一月四日（土）
試験時間 十三時～十六時

注意

- 一 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 二 問題冊子は二十頁からなっている。試験開始後、直ちに確認すること。
- 三 頁の落丁・乱丁および印刷不鮮明の箇所等に気付いた場合には、監督者に申し出ること
- 四 解答用紙には、忘れずに受験記号番号を記入すること。
- 五 解答用紙を持ち帰ってはならない。終了後、問題冊子および下書用紙は持ち帰ること。

以下の文章は、社会学者である塩原良和・稲津秀樹が編集した『社会的分断を越境する』（青弓社、二〇一七年）所収の塩原良和著「序章 越境的想像力に向けて」による。この文章を読み、次の問一、問二に答えなさい。なお、問一、問二ともに、改行のために生じる余白および句読点も文字数に含む。解答は縦書きで記すこと。

問一 本文の中では、いくつかの「想像力」について述べられているが、「越境的想像力」とは両立しないような「想像力」を、本文から二つあげ、それがどのような点で「越境的想像力」と異なるのか、六〇〇字以上、八〇〇字以内で述べなさい。

問二 現代社会において「越境的想像力」を阻むものを一つあげ、それを克服するためにはどうしたらよいか、あなた自身の経験を踏まえながら、あなたの見解を一四〇〇字以上、一六〇〇字以内で具体的に述べなさい。なお、解答の冒頭には自分の見解にふさわしい題名をつけなさい。

はじめに——想像力の危機と繁栄

この十数年ほど、人文社会科学の様々な領域で「想像力 (imagination)」という言葉が冠した著作、あるいは想像力の社会的重要性に言及した研究が目立っている。こうした研究業績が増えているのは、現代が「想像力の危機」の時代だということを見立てが説得力をもつからかもしれない。二〇一六年後半、グローバルな宗教的過激主義によるテロリズム（これ自体が被害者への想像力を欠いた行為であることはいままでもない）との戦いという名のもとに、先進諸国での移民・難民に対する排斥運動はますます活性化しているように見える。このような排外主義は、民族・文化的に異なる他者にだけ向けられてい

るわけではない。グローバリズムと新自由主義の台頭とともに、先進諸国の貧困層への福祉政策は懲罰化し、犯罪者対策はゼロ・トレランスの様相を強めている。日本を例にとっても、他者の置かれた立場や思いに対する想像力の不足、あるいは想像することの拒絶を伴う社会現象が顕在化している。二〇〇〇年代後半から社会問題化している外国人住民や難民、先住民族に対する排外主義運動と、その土壌としてのネット右翼的なレイシズム・ナショナリズム、そして生活保護受給者などの貧困層や障がい者に対するバッシングや暴力などは、その顕著な事例である。このような想像力の衰退によって、日本が「分断社会」という危機的状况にあるという見立てもある。

歴史学者のテッサ・モーリススズキは早くも二〇〇〇年代初頭に、「批判的想像力の危機」の進行に警鐘を鳴らしていた。それは次第に影響力を強める「道徳的に空虚な地球規模でのネオリベラリズム」と、「道徳のスローガンで粉飾された大衆扇動的ナショナリズム」に対抗するための「説得的オルタナティヴを想像し、かつ伝達するという能力」が知識人やメディアに欠如している状況を意味していた。彼女の時代診断は二〇一〇年代後半の日本社会でも、依然として有効である。新自由主義とグローバリズムは、グローバルな市場原理主義に適応するための「改革」を「この道しかない」(There is no alternative)」と人々に押し付けようとする。「情勢は急激に変化している」から、あるいは、「非常事態」だから。「国益を守る」ためには、「この道しかない」「この道を前へ」と言い含められてしまう。時代の変化に対応できない人々は、「自己責任」の名のもとに切り捨てられる。人類学者のガッサン・ハージが示唆するように、このような状況に置かれた人々はオルタナティヴを模索するラディカルな想像力を奪われ、切り捨てられる「痛み」に「耐えて、しのぎきる (waiting out)」よりほかはない。それでも現状とは異なる社会のあり方を想像しようとする人々は、机上の空論を語るエリート、あるいは裏切り者として非難されることになる。このような風潮は、批判的思考を育む人文社会科学教育に対する逆風の一因にもなっている。

だが見方を変えれば、まさに新自由主義が浸透しているがゆえに、現代は想像力が繁栄する時代でもある。日本社会でも、

想像力はまさに人々が競争に勝ち残るために必須な人的資本、すなわち本田由紀がいう「ポスト近代型能力」あるいはリチャード・フロリダがいう「クリエイティブ資本」の一種としての「コミュニケーション能力」「創造力」の源泉とみなされている。ビジネスに役立つ想像力を鍛えることは、「自己実現」「自己開発」の目的にもなるのだ。

ビジネスのための人的資本としての想像力が、異なる他者との共生のために必要な想像力になることはあまりない。なぜなら人的資本としての想像力は、「経済活動に資する個人の自己実現のため」という前提条件があらかじめ組み込まれた「経済ベース」の想像力だからだ。この前提条件は「これ以上は想像力をはたらかせなくてもいい」という免責事項となり、経済や自己実現とは無関係に発現する他者への想像力をむしろ制限してしまう。それは免責事項を破壊していくリフレクシブな展開を許容しない、飼い慣らされた想像力にすぎない。

いまや国際社会に共通の問題となった排外主義や社会的分断を克服するためには、こうした制約を超えて、民族・文化・階層の異なる人々が同じ社会のなかでも生きていくための想像力を社会全体として高めていかなければならない。

1 共感と想像力

想像力という言葉は、一般に多様なニュアンスで用いられるが、「共感」と同一視されることも少なくない。アダム・スミスは、共感 (sympathy)、哀れみ、同情という心的状態が想像力によって生み出されると考えていたようだ。現代でも、例えば社会学者の津田正太郎は共感 (empathy) と同情・同感 (sympathy) を「他者の置かれた状況や、その状況において他者が抱くだろう心理を想像すること全般を『共感』とし、他者の不幸や悲しみに対して生じるそうした反応を特に『同情』とする」と定義している。

たしかに、想像力と共感を区別して考える必要がない場面も多い。しかしあえていえば、両者にはいくつかニュアンスの

違いがある。まず、共感は感情をもつ（と想定される）他者について何かを「感じる」ことだが、想像力はより広い射程をもつ。地理学者のイーファー・トゥアンは、世界についての「知っていることのすべて」を動員しながら真理を探究しようとしたJ・S・ミルの想像力のあり方について言及しながら、想像力を「現実」を探究することに向けられた知的活動だとした。このトゥアンの指摘からも示唆されるように、想像力は「感じる」という態度とともに、「考える」という能動的な姿勢とも関連づけられる。

また共感や同情は、他者の感情や置かれた状況を「自分のことのように感じる」感情移入を伴うものとされる。哲学者のマーサ・ヌスバウムによれば、同情という感情を抱いた人は、以下のような判断をおこなっている。すなわち、①他人がひどく悪い目にあっている、②人は自分の窮状のすべてに責任があるわけではない、③私たち自身が同じような目にあいやすい、④同情の対象になる人は、同情的な感情を抱いている者にとって大切な人だ。特に③と④の条件は、自分と似ていたり、よく知っていたりする他者に共感しやすく、そうではない人には共感しにくいということを意味する。もちろん、似てもいないしよく知りもしない人に感情移入することもあるが、それは一方的な思い込みや不十分な知識に基づく誤解である可能性が高い。最も身近でよく知る他者であっても、自己と他者が決して同じではない以上、そこには常に「わかりあえないこと（共約不可能性）」がある。したがって、感情移入としての共感が、実は「勘違い」である可能性は常にある。それに気づいたとき、他者に「裏切られた」という反感が高まることもある。

それに対して、共感と区別されるものとしての他者への想像力は、自分が感じていることにそのまま依拠しない。私たちは自分の共感が間違っている可能性を自覚しながら他者について考えることができるし、そもそも自分の共感が及ばなかったり反感をもっている他者についてさえ、考えることができる。そのため、想像力には共感に加えて「知っていること」、すなわち知識が必要である。もちろん知識さえあればいいわけではないが、他者に対する知識をもつことは私たちの他者に対する感受性の限界を補い、押し広げてくれる。

そのためここでは他者、あるいは他者で構成される社会に対する想像力を、個人が知識を活用しながら自らの共感の限界や制限を押し広げて他者／社会を理解しようとする努力と定義したい。なお、この場合の「知識」とは、言語化・体系化され専門分化されたものとはかぎらない。経験としての知、身体化された知もまた「知っていること」である。ただし実際には、「感じる」こと（感情）と「考える」ことの区別は曖昧である。前述のように、ヌสบアウムも同情や共感のような感情には思考が伴うとしている。また感情社会学の知見は、そもそも人間の感情は「自然なもの」というよりは、社会的規範によって構成・規定される部分が大きいことを明らかにした。そのため他者を想像するとは、他者について「感じながら考える」ことだという表現のほうが適切だろう。

2 社会学的想像力と歴史的想像力

アメリカの社会学者C・W・ミルズは、人間と社会のあり方を考察する際の想像力の重要性を力強く宣言した。彼は一九五〇年代の時点で、人々が自分自身の価値観に従って自分の人生を決定する能力が社会の急激な変化によって危機に瀕しているという時代診断をすでおこなっていた。その危機を克服していくためには情報をただ集めるだけではなく「情報を駆使し理性を発展させることによって、かれら自身の内部や世界におこることがらを、明晰に総括できる精神の資質」が必要であり、それをミルズは「社会学的想像力 (sociological imagination)」と名づけた。それは「巨大な歴史的状況が、多様な諸個人の内面的生活や外面的生涯にとって、どんな意味をもっているかを理解する」力であり、「歴史と生活史とを、また社会のなかでの両者の関係をも、把握することを可能にする」。

「社会学的想像力を…引用者注」行使することによって、制約された軌道の上だけで思考を進めてきたにすぎないよう

な人びとが（略）突然目が覚めたと感じるようになることが多い。（略）かつては健全にみえた古い決定が、いまとなつては途方もなく愚かな精神の所産と思われてくる。驚くという能力がふたたび、いきいきとよみがえる。かれらは新しい思考の様式を獲得しているのであり、価値の転換を経験しているのであって、これを一語にしているならば、かれらはその省察および感受性によって、まさしく社会科学の文化的意味を体験しているのである。

すなわち社会学的想像力とは、一見すると無関係なように見える個人の私的問題と社会構造がどのように関係しているのかを「省察および感受性によって」把握し、それによって人間と社会についての新たな価値観や発想を「驚き」とともに獲得する営みなのである。

ミルズは、人々が社会学的想像力をはぐく育むためには歴史に関する知識が不可欠だとも考えていた。その歴史学の立場から、現在を生きる私たちの過去・歴史との関わりかかという意味での想像力の重要性を指摘したのがテッサ・モーリス・スズキだった。一九九〇年代の日本での戦争責任／戦後責任をめぐる論争、あるいは自身がイギリスから移り住んだオーストラリアの先住民問題を念頭に置きながら、彼女は「連累（implication）」という概念を提起した。それが意味するのは、その人自身が直接加担していない歴史的な不正義に対して正当な対応がなされていない社会から直接・間接になんらかの利益を受け、自己の人格や生活を形成してきた人には、その過去の不正義と関わりがあるということである。そのような過去への連累の意識は、歴史的知識によってだけではなく、過去に生きた人々に対する想像力によっても形成される。そのため、過去への連累の意識を適切に持ち続けるためには、異なる歴史理解をもつ人々との対話を通じて歴史を絶えず再想像し続けることが必要である。

この連累的想像力は、私たちがいま生きている社会のあり方への「歴史に学んだ反省」に基づく批判的意識を呼び起こす。それこそが、日本を含む多くの社会の歴史修正主義者が忌み嫌うことでもある。歴史修正主義は、「歴史に学ぶ」という連累

的想像力の呼びかけを「自虐的である」と拒否し、「未来指向」の名のもとに過去を「済んだこと」として「水に流そう」とする。こうして一九九〇年代の日本で台頭した「自虐史観批判」は、すんだことを水に流すための「新しい歴史教科書」の制定・採択の運動として展開していった。それは二〇〇〇年代後半以降の草の根保守の社会運動の世界観にも、主にインターネットを媒介として影響を与えた。この世界観のなかでは、「歴史に学ぶ」連累的想像力は個人がその社会に存在する価値をおとしめ、ひいては社会全体を衰退させるものだと非難される。しかしそれは本来、生産的で創造的な知的営みである。歴史に学ぶことによって現在の社会の問題点を理解することではじめて、よりよい未来を構想することが可能になるからである。

3 ナショナルな想像力の限界

モーリススズギがいう連累的想像力には、既存の国家権力の中心の視点から叙述されてきた歴史を、マイノリティや辺境部といった権力からは遠く離れた周辺から語りなおす試みが含まれる。そこから彼女は、歴史学を含む地域研究の対象としての「地域」を、人・モノ・情報・思想・観念などの複数の「フロー（流れ）」が相互作用して形成される「渦」として生成されるものと捉える「液化化された地域研究」という視座を提案した。

歴史的想像力の刷新を促すこうした研究が逆説的に明らかにするのは、本来は国境を越えて広がっていくはずの私たちの想像力が、国民国家の存在を自明の前提とする世界観によって制限され続けていることである。『想像の共同体』でベネディクト・アンダーソンが解き明かしたように、「国民（ネイション）」という社会的構築物そのものが、我々と他者との境界を設定しようとする想像力によって生み出される。このナショナルな想像力は多くの人々に他民族の支配からの解放をもたらした半面、国家間の紛争や摩擦、国民国家内のマイノリティの抑圧、レイシズムなどの問題の原因にもなってきた。私た

ちは同じネイションに属しているかどうかで我々と他者を区別することを、暗黙の前提としてしまいがちである。社会学者のウルリッヒ・ベックが指摘したように「ナショナルな近代は、その同質性の固定化によって、国家間、民族間、宗教間の対話というアイデンティティの形成力、つまり（略）対話的想像力を無限に失ってきた」。ここでいう対話とはオーラル・コミュニケーションに限定されないし、誰かが能動的に「声を発することから始まるものだともかぎらない。ここでは社会学者レス・バックスの議論に触発されながら、対話を「他者に耳を傾け、受けとめ、応答しようとする」と定義してみる。

ナショナルな想像力は、学術研究にも大きな制約を与えてきた。ベックが「方法的ナショナリズム」と呼ぶ、人間と社会にとって国民国家が中心的な位置を占めるという暗黙の思い込みが、人文社会科学系の学者に共有される傾向があったからだ。この方法的ナショナリズムは、グローバル化によって国民国家の自律性が低下した現代世界を分析する際には、むしろ障害になる。そこでベックは、現実がグローバル化・トランスナショナル化していることを前提として、社会を分析する視座としての「コスモポリタンの現実主義」を提唱した。ベックが強調しているように、トランスナショナルリズム／コスモポリタニズムは、ナショナルな想像力の制限を超えた想像力のあり方、すなわちジェラード・デランティがいう「コスモポリタンの想像力 (cosmopolitan imagination)」を人々に要請する。デランティはそのような想像力を、文化的差異や多様性を承認し、社会現象がグローバル・ローカルの相互作用のなかで発生してくることに注目し、既存の境界線にとらわれず、なおかつ境界で発生する交渉に留意し、グローバルな倫理のもとに政治共同体を再創造することを目指すものだとする。

4 社会階層と想像力の制約

現代社会で人々の対話的想像力、すなわち他者を対話可能な対象として認識し、対話を実現しようとする知的努力を制限

しているのは、文化や民族、国籍の境界線だけではない。前述のように、想像力は知識を活用した他者や社会の理解への努力といえる。しかし、そのことは社会階層ごとに異なる知識の様式や配分のされ方によつては、人々の他者への想像力が分断されうることを意味する。とりわけ学校で教えられる体系化された専門知へのアクセスには、学歴による格差が生じやすい。現代人にとつての重要な知識のリソースであるインターネットの利用頻度や利用の仕方（リテラシー）にも、階層による違いがある。その結果、そうした知識によつて生み出される他者への想像力のあり方も変わってくる。また、階層の違いは文化資本の違いでもあり、それが身体化された知としてのハビトウス⁽¹⁾のあり方にも違いをもたらす。

一方、「経験としての知」にも、出身階層による差異があるため、それに基づく他者への想像力にも階層間の食い違いが起こりがちになる。例えば若者が留学や海外旅行、スタディーツアーなどで「グローバルな経験」をすることは「視野を広める」のに役立つとされる。それは、人的資本化された想像力を養う方法として商品化されてもいる。こうした商品化された経験は、経済的に余裕があるミドルクラス以上の階層に属する若者のほうが入手しやすい。現代日本の若者のもう一つの有力な「グローバルな経験」のルートである海外在留子女としての生活も、現地ではミドルクラス以上のライフスタイルや交友関係を経験することがほとんどだろう。

そのため、こうした「グローバルな経験」が、自らと階層が異なる人々への対話的想像力を高めるとはかぎらない。商品化された観光旅行やスタディーツアーでの「現地の人々」との交流は、そもそも安全や快適さが確保された限定的・一時的なものでしかないことが多い。また大学に通う留学生も、比較的狭い高学歴者のコミュニティのなかで生活しがちである。日本に戻ったあともそのような人々とSNSなどで国境を越えたつながりを保っていたとしても、それは階層を超えたつながりではないかもしれない。

一方、労働者階級に位置する人々は、ミドルクラスとは異なるそれぞれの経験を通じて生活世界としての「世間」を知る。ポール・ウィリスが描いたように、そのような「世慣れた」人々からみれば、高学歴ミドルクラスの人々こそ、ほんとうの

世間を知らない想像力が欠如した人々に見えることもある。彼／彼女たちにとつては、「グローバルな経験」よりも「ジモトの経験」のほうが、「世間を知る」ためには重要なのである。このように、階層的差異に規定された想像力の違いが、人々の対話を阻害することがある。こうした対話的想像力の限界は階層に基づく人々のリアリティ（現実感覚）の乖離をもたらし、そしてグローバリズムと新自由主義の影響力の拡大は、それを確実に広げつつある。冒頭で述べた排外主義的風潮の高まりの背景にも、主流派ミドルクラス国民の想像力が貧困層や民族・社会的マイノリティのリアリティに届いていないことが影響している。

5 リアリティの分断とステイグマ化

「あの人の主張にはリアリティがない」などというとき、私たちはリアリティという言葉を「世の中とはそういうものだ」、すなわち社会のあり方に対する適切な認識に関する感覚という意味で使っている。ただし私たちは、「世の中」を直接にみることはできず、言語や象徴などを介して理解するので、リアリティのあり方は人それぞれであり、そのどれかだけが客観的に正しいということはない。そして精神分析では、ある人がもつリアリティはその人の自分自身に対するイメージの形成（「想像界」と結び付けて論じられることがある。個人の自己イメージ（アイデンティティ）は、他者との言語や象徴を介した相互作用を通じて想像されるからである。

ここで留意すべきなのは、人々の中のリアリティの違いは、「文化の違い」とイコールではないということである。もちろん、同一のエスニック文化や国民文化の影響を受けて育った人々のリアリティが似通うことはありうる。しかし同じ文化に属していても、周囲の人々や生活環境の違いによって人々のリアリティは異なってくる。そのことを如実に示すのが、二〇〇〇年代以降の欧州で頻発しているイスラム過激主義によるテロリズムである。それが先進社会を大きく動揺させる理由

の一つは、テロリズムの主な実行者たちが欧州社会で生まれ育った移民出自の若者、すなわち「ホームグロウンテロリスト (home-grown terrorist)」だったことである。そうした人々は、生まれ育った社会のミドルクラスの人々が「世の中とはそういうものだ」と思って享受している、自分たちにとっても望ましくみえるライフコースや消費生活から、貧困や格差、差別や偏見、孤立やアイデンティティの混乱などによって排除されている。自分が排除されることこそが、「世の中とはそういうもの」になっている若者が存在する。このリアリティの分断に気づいた若者の絶望や憎悪がグローバルな宗教的過激主義のネットワークと結び付いたとき、「ホームグロウンテロリスト」が生まれる。

にもかかわらず、こうしたテロリズムは依然として「西洋対イスラム」の「文明の衝突」として表象されがちである。その結果、自分たちが「イスラムの脅威」に包囲されているというリアリティが、西欧社会の指導者やマスメディアによつてますます表明されるようになる。これは「戦争」であり、いまは「戦時」なのだから、「平時」では許されない非人道的な手段で敵を探し出して攻撃し、罪がないムスリムの市民が巻き添えになることもやむをえないとする「戦時社会 (warring society)」のメンタリティが広まりつつある。こうして、国内外に住むムスリムという他者への対話的想像力がますます失われていく。

同様の風潮は、日本社会でも見られる。日本の外国人住民とテロリズムを同一視する論調は、二〇一六年時点ではそれほど目立たない。しかし二〇〇〇年代以降、警察や入国管理局、一部の自治体などの非正規滞在者取り締まりキャンペーン、外国人が引き起こした事件をセンセーショナルに取り上げる一部マスメディアの報道やインターネット上の右翼的言説の影響などによって、外国人住民の増加を犯罪や治安の低下と結び付ける偏見が広がっていった。その一方で、社会的下層に位置する外国人住民の若い世代のなかに、親世代からの貧困の再生産にとらわれてしまう状況が表れ始めていることが、いくつかの事例や統計的調査から明らかにされてきた。外国人を犯罪者やテロリストと同一視する世間の眼差しは、そのような貧困の再生産を助長することはあっても是正することはない。そのためそうしたレッテル貼り(ステイグマ化)が自己成

就的予言⁽²⁾となり、一部の若者を反社会的行動に追いやってしまう危険性がある。

外国にルーツをもつ若者たちの多くは日本で生まれ育ち、日本の文化に慣れ親しんでいる。そのため、ここでも問題になるのは文化の違いではなく、リアリティの分断である。テロリストや犯罪者というレッテル貼りが自己成就的予言になるのを防ぐためには、このリアリティの分断を修復していく方策を考えなければならない。階層間の格差や貧困、社会的排除がリアリティの分断の原因だとすれば、それを是正する社会的包摂のための政策が求められる。そのような政策を通じて、人々が自分たちを排除してきた社会の影響を受けて構築してきた自己イメージを再想像する自由（ドウルシラ・コーネルがいう「イマジナリーな領域への権利」）が、獲得されなければならない。

一方、すでに確立した武装組織や犯罪グループを抑え込むためには、一定の軍事力・警察力の行使はやむをえないかもしれない。しかし、「憎しみの連鎖」がさらなるリアリティの分断をもたらすのを防ぐために、その行使は十分に抑制的でないならばならないだろう。そのような政策や措置を可能にするのもまた、他者への想像力である。ジョック・ヤングは、現代社会での排除と犯罪の関係を人々のリアリティに即して理解するために、犯罪学における社会学的想像力（犯罪学的想像力 *criminological imagination*）の復興が必要だと主張している。だが、社会のなかにそうした想像力を育んで広めていくことが、どのようにすれば可能になるのだろうか。

6 想像力を「越境」させる

ここまで、個人が知識を活用しながら、自らの共感の限界や制限を押し広げ、他者を理解しようとする努力のことを想像力と定義し、また経済ベースに飼いならされない、対話的想像力を育んでいくことがグローバリズムと新自由主義が台頭する社会で起きている排外主義の克服に不可欠だと問題提起した。そしてナショナルな想像力、社会階層における不平等、ス

テイグマ化という三つの阻害要因が絡み合うことで人々のリアリティの分断が助長されていて、他者への対話的想像力の伸長のためにはこの分断を乗り越える必要があることを示した。

冒頭で述べたように、そのような想像力の広がりを実現するものとして、本文では越境という経験や行為に注目している。ある人が自分自身のリアリティの境界線の外にある他者のリアリティを経験することを「越境 (border crossing)」と呼んでみよう。もちろん、世界にリアリティは無限に存在し、そのすべてを一人の人間が経験することはできない。しかし、自分が越境したときに、どのようなリアリティを経験するのか、想像することはできる。重要なのは、この越境的想像力をどのように伸ばしていくかである。そして越境的想像力も想像力の一種である以上、なんらかの知識を得ることによって発展させること、つまり「学ぶ」ことが可能である。もちろん、ここでいう「学び」とは学校教育に限定されない専門知・経験知・身体知を獲得する機会のことである。学びのチャンスは教室や本のなかにもあるが、家庭、地域、職場、ストリートなどにも転がっている。

それでは、具体的にどのようなようにして越境的想像力を学ぶのか。私たちが用意する答えはシンプルである。それは、実際に越境してみることに尽きる。もちろん、実際にすべての境界を越えることはできない。だからこそ想像力が必要なわけだが、限られた越境の経験でも、まだ経験していないリアリティを想像する力を養ってくれる。境界を越えるということが、まだ越えていない境界があるのだということを教えてくれる。

越境という概念は、人間と社会にとつての地理的な境界がもつ意味や、境界の変化や再形成を考察する「境界研究 (border studies)」という学際的領域とも関係している。ただしここでいう越境は、地理的な境界を越える物理的移動だけを指しているわけではない。越境という言葉は、越えるものがどのような境界なのかによって多様な意味を帯びてくる。

移動としての越境

越境という言葉には、「越える」という移動の意味が込められている。それは、自ら進んでおこなう能動的な移動だとはかぎらない。難民・国内避難民・被災者、親に連れられて移住する子どもなど、自ら望んでいないにもかかわらず移動せざるをえない人々もいる。いずれにせよ、前述のようにナショナルな想像力が優位を占める状況下では、個人が越境する物理的境界線のうち最も重要だとされるのは国境である。トランスナショナルリズム研究が焦点化してきた「越境」とは、まさに国境を越えた移動と交流だった。

それに対して、物理的には必ずしも境界線を越えて移動しない、象徴的な意味での移動もある。異なる文化・価値観との接触・交渉、ライフコースや社会階層が変化する際、個人は物理的にはなく象徴的に移動を経験しているのだ。それは、自分の人生が「うまくいつている」「停滞している」という、移動を含意するメタファーによって表現される。これをハージは「存在論的移動」と呼んだ。

出会いとしての越境

物理的、あるいは象徴的に越境することは、越境した先にいる他者と出会うことでもある。あるいは自分自身が越境しなくても、越境してきた他者と出会うこともある。したがって越境という行為には、そのようにして出会った人々がその場所でどのように折り合いをつけていくのかという「共生」の課題が伴う。

井上達夫はこの共生という言葉を「コンヴィヴィアリティ (conviviality)」の訳語として再定義した。かつてイヴァン・イリイチは産業主義によって人間性を奪われていく文明のあり方を批判し、「人間的な相互依存のうちに実現された個的自由」としてのコンヴィヴィアリティの再興を説いた。井上らはこの言葉を、異質な他者に対して不寛容な同質化社会であり、あらかじめ設定された単一の目標への競争(エミュレーション)によってますます画一化している日本社会が目指すべき「生

の形式を異にする人々が、自由な活動と参加の機会を相互に承認し、相互の関係を積極的に築きあげてゆけるような社会的結合」という理念へと再解釈した。イギリスのカルチュラル・スタディーズを代表する学者の一人であるポール・ギルロイもまた、多文化的状況のなかで人々がともに生きていく際の相互作用をコンヴィヴィアリティと表現した。これは、オーソトリアの社会学的多文化主義研究のなかで発展してきた「日常的多文化主義 (everyday multiculturalism)」という概念とも共通点がある。

ジュディス・バトラーは同様の問題意識から、「共棲」(cohabitation) きようせい という理念を提案している。すなわち、「地上に暮らす人々の多種多様なありようこそが、社会政治生活のくつがえしえない存立条件」であり、「われわれが地上で共棲する相手は、選ぶ前から決まっている」。それだけに、「われわれには、自分で選んだこともなければ、おたがいに社会的な帰属意識を感じてもいない人々と共棲するだけではなく、そうした人々の生を、かれらがその一部をなす多元性を守る義務があるのだ。

共生／共棲は、他者と一つの場所を共有するという経験を伴っている。そのため、人々の共生／共棲のあり方を理解するためには、具体的な場所との結び付きに即して考えなければならない。ここでいう共生／共棲は、コスモポリタニズムの知的伝統に親和的だが、地理学者のデヴィッド・ハーヴェイが指摘するように、そのような理念が貧弱で陳腐な地理学的知識や見解によって制約され歪曲わいきよくされることがあつてはならない。そしてそのためには、ある種の想像力が必要だと同じく地理学者のドリーン・マツシーは示唆する。それは、ある場所を人間同士、あるいは人間とそうではないものが必然的な理由もなく「ともに投げ込まれている (throwntogetherness)」なかでおこなう交渉によって生成され、それに対する応答責任を私たちに迫る出来事として眺める想像力である。

例えば都市は人々に様々な出会いを提供し、共生／共棲の舞台になってきた。しかし再開発(ジェントリフィケーション)や景気の変化はしばしば、住民が階層に基づいて分断される状況をもたらす。地理学者ニール・スミスによれば、ジェント

リフイケーションが一段落し経済状況の悪化による都市衰退への憂慮が高まると、低所得者層や貧困層が都市の公共空間や公共サービスの恩恵を不当に享受しているという反発がミドルクラスの間で高まる。その結果、低所得者層や貧困層を積極的に都市から排除する政策が支持される「報復都市」状況が生じる。それに対して、社会学者のリチャード・セネットはかつて、都市が本来有している、雑多な人々が出会い交渉しながら日常を営むという「無秩序」を活用して、異なる他者といやが応にも出会わざるをえない状況のなかに人々を投げ込むことによって人間的に成長させていくような都市（無）計画のあり方を構想した。アントニオ・ネグリとマイケル・ハートも、異なる人々（マルチチユード）の出会いから〈共〉が創造される場所としての大都市の側面に期待する。

しかし、現代日本社会の状況を見るかぎり、都市の生活が自動的に人々に出会いと協働をもたらすという期待は楽観的だろう。むしろ他者と「出会おうと思わなければ出会わずに暮らせる」という都市のもう一つの側面が、ネットを通じたコミュニケーションの進展によってますます強まっているように見える。おそらく今日の先進諸国の都市に住む人々は、仮にそれが民族・文化的に多様な都市だったとしても、ただそこに住むだけで異なる他者との出会いの経験を積むということにはなりにくい。だとしたら、他者に「出会わずともすんでいる」人々を生身の出会いの場に引きずり出すような仕掛けが必要になるだろう。

日常に「埋め込まれた」越境を再発見する

物理的、あるいは象徴的に個人が越境し、その先で新しい他者のリアリティに出会う。あるいは、越境してきた他者のリアリティと出会う。私たちがそのような越境を経験するとしたら、それは何かしら非日常的な経験を意味しているのだろうか。しかし、越境が常に非日常的な経験だとはかぎらない。むしろ社会がグローバル化するということは、越境の契機は日常のなかに「埋め込まれる」状況の増大を意味している。例えばコミュニティでの人々の営みのなかに、「根差した」コスモ

ポリタニズムの萌芽を見いだすことができるかもしれない。あるいはコミュニテイの営みでさえ、グローバルな市場経済が促す越境のメカニズムに組み込まれてしまうのかもしれない。いずれにせよ越境は、必ずしも非日常的な経験とはかぎらない。むしろ、一見すると平凡な日常のなかに、越境の契機が紛れ込んでいる。それはあまりにもありふれているため、しばしば見過ごされがちなのだ。しかし、いったん非日常としての越境を経験してから自ら「ジモト」の日常に戻った人には、以前は気づかなかった日常に埋もれた越境の契機が見えてくることがある。非日常的な「旅」を経験することで、日常のなかに埋め込まれた越境を発見する、それが川端浩平がいう「方法としての越境」である。

おわりに——「リアルに」想像する

ここまでの議論をまとめ、越境的想像力を次のように定義したい。すなわち、それは物理的・象徴的な移動を通じて他者と出会い／なおそうと望むことであり、そうした他者が生きる、自らの共感の範囲を超えたリアリティを共約不可能性を前提としながら理解しようとし続けることであり、そして、他者たちと場所を共有する共生／共棲の関係を結んでいこうと努めることである。したがって、それは必然的に他者との対話を伴う。そこから示唆されるのは、他者との対話には、他者をその他者が望むあり方になるべく沿って想像する（すなわち、他者を適切に承認する）責任が伴うということである。シンブルにいえば、越境的想像力とは、境界を越えて出会う他者を承認し、共生／共棲するために、対話しようとすることなのである。

もちろん共約不可能性が前提である以上、完全に適切に他者を想像／承認することはできない。想像力は常に勘違いを含み、不完全であり続けるが、それでもなお他者に耳を傾け応答するという意味での対話、すなわち保莉実がいう「ギャップごしのコミュニケーション」を続けていくことで、適切な他者の承認に近づこうと努力する責任が私たちにはある。ただし

前述のように、想像力をはたらかせるために必要な専門知・経験知・身体知は社会構造によって不均等に配分されている。そのため、他者を適切に想像／承認することは個人に課せられた責任であると同時に、想像力の源泉となる知識を得る機会の公平な配分の実現を含む、社会全体の責任でもある。

トウアンは現実の探求に向けられた知的活動としての想像力と、閉塞的な自己満足としての「空想」を区別した。空想がなんらかの被害妄想や強迫観念を伴って肥大していくことを、「妄想」といつてもいい。他者とその集合としての社会を適切に想像／承認する責任をもつということは、「空想」や「妄想」とは区別された「リアルな」想像力を持ち続けようとすることである。ナンシー・フレイザーは、グローバル化時代の批判的思考での「再想像」（「再フレーム化」）の重要性を論じた。様々な要因が複雑に入り組んで形成されているグローバル社会で「現実的に」考えるためには、これまで見えていなかった背景を可視化することで問題を再設定する不断の努力が必要である。自明なものに見えた既存の境界線を相対化していく。それによって、それまで見えていた自己―他者、原因―結果、問題―解決策とは別のあり方、すなわち、オルタナティブを探ることが可能になる。これがハージがいう「オルタ・ポリティクス」にはかならない。しかし、人々のリアリティが複数的である以上、このオルタナティブな想像力がリアルであり続けるためには、他者との対話可能性を高めていかなければならない。そのためにこそ、私たちは越境的想像力を育んでいかなければならないのである。

（塩原良和「序章 越境的想像力に向けて」による）

註

（1） ハビトゥス…特定の階級・階層・家族などの環境のなかで個々人が長い時間をかけて身につける、ものの見方や感じ方や言葉遣い、立ち居振る舞い方だが、当の個人にもほとんどそれとして自覚されないその人の性向。

(2) 自己成就的予言…予言それ自体が原因となって、その予言で語られている内容（その予言がなければ起こらなかつたはずの内容）をみずから実現させてしまう予言のこと。たとえば、「あの銀行は倒産する」といううわさ（予言）が原因となって、預金を全額引き出そうとする人々が窓口に殺到し、健全な銀行が倒産の危機に陥ること。